



令和元年十月

城北中だより

城北中学校教育目標

	生徒数
○思いやりのある生徒	1年 173名
○真剣に学ぶ生徒	2年 156名
○健康な生徒	3年 176名
	特別支援学級 6名
	全校生徒数 511名

足跡(そくせき)

校長 玉崎 芳行

秋の休日、珍しく書庫の片付けに時間を割いた。西の空が茜色に染まりかけたので、そろそろ終いにしようかと、机の一番下の引き出しを開け、奥に収めたノートのかたまりを引っ張り出した。

偶然だったのか、必然だったのか、“若かりし頃” 学生時代の日記に出くわしてしまった。ページを開こうか開くまいか躊躇(ちゅうちょ)した。青くさい、独りよがりなことばを、乱れに乱れ書きなぐったことだけは、うっすらと記憶の片隅に残っている。あの頃のむき出しの自分と向き合うには、いささか抵抗があった。それでも、自嘲的な笑いを浮かべながら、中学時代のページを開いてみた。顔が赤くなった。ちょっぴり心臓が高鳴った。綴られたことばは、その当時の自分を示す。

「“絶対”なんて、絶対ない！」「朝の訪れぬ夜はないんだ。必ず夜明けは来る！今は、たえろ」
「やっぱりオレには無理なのかなあ…」「どうせオレなんて…」「いいのか、このままで？」

あの頃は、何を思い、何を考え、何を支えに学校に通っていたのだろう。今となっては、はっきりと思い出せない。ただ、何らかの目標に向かい、がむしゃらに突き進もうとするエネルギーがあったり、友達の何気ない一言に傷ついたり励まされたり、周りからの助言に素直に耳を傾けず意地を張り続けたりしていた。そんな自分がいたことだけは確かなようだ。

どうしても、何としても行きたい学校があった。生徒会役員として、責任を果たそうとしていた。学校行事に熱くなっていた。先生によく叱られていた。最後まで、告白できなかった女の子がいた。

意志在る処に道は拓かれることを知った。誰かのために汗をかくことの尊さを知った。人の気持ちは、時としてどうにもならないことを思い知った。本当の友達のありがたみを知った。

さて、我らがチーム城北。1、2年生は新人戦が始まった。3年生は第1回学力検査を終えた。今、あなたは、どんな自分と向き合っているのだろう。今のあなたが、明日のあなたを創る。今のその一歩が、あなたの人生の足跡となる。良き足跡を刻んでほしい。